生物災害～呪縛する闇～

覇の賢者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生物災害～呪縛する闇～

【Ｎコード】
Ｎ６３２０Ｈ

【作者名】
覇の賢者

【あらすじ】
夏休みの真っ最中、平穏に暮らしていた６人の高校生達に突如襲う恐怖。死者が蘇り、人が人を喰らい現実ではありえない現象を目撃する。生物災害の被害にあった感染者は自我を失い”食べる”と言う欲求しか持たない。知っている人や昔から馴染みのあった人が感染し、動揺する高校生達の危機的心情を奥深く追求するホラー物語。

プロローグ（前書き）

初めまして、覇の賢者です。初の作品なので不可解な点もあると思います。この作品はホラー作品なのでグロテスクな表現や不快にさせる点があります、お読みになる際は注意して下さい。

プロローグ

―――時は真夏日の夕方、日本の東北地方である事件が起こった。

宮城県石巻市、此処が日本で最初の恐怖と絶望の始まりだった・・・。

８月８日　ＡＭ１０：００

俺はいつものように目覚ましの音で起床した。適当に朝食を食べて遊ぶ準備をする、まぁ別に俺ん家で遊ぶから準備なんて必要ないんだけどね（笑）

それから３時間くらいがたったかな？暇だったから部屋の中を掃除してだらだら過ごしていたら、突然玄関のインターホンが鳴った。

「よぉ雅貴！久しぶりだな」

満面な笑みを浮かべながら部屋に入ってきたのは、外国人の友達のチョウ君だ！！チョウ君はフィリピンから留学してきた高校生で本名はチョウドリー・アフラヒームだ。チョウ君の実家は武器を密輸する仕事をしている。（密輸ですか！？ｂｙ作者）

―――また、インターホンがなった―――

ドアが開き部屋に三人の男が来た。まず体格が良い二人は自衛隊や軍事専門の企業に属する阿部巧と阿部俊樹、もう一人はメンテナンスを得意とする製造会社の息子、千葉裕太だ。

「久しぶり、やっと来たかお前ら」

「悪い少し遅れた、港で溺れ掛けていた婆さんを助けるために必死

だったのだよ」

と、軽い冗談を吐いて図々しく入って椅子に座る裕太。それを横目で見る巧と俊樹が無言で部屋に入る。それから、チョウ君を中心に皆で談話して普通の生活を送る。時には、裕太とチョウ君が人生を振り返りながら黄昏ている（笑）

そんな二人を憐れみな目で見ている雅貴と巧と俊樹は、何かに疑問を持ちながらその場面をずっと見ていた・・・。

8月8日　PM2：16
ーー東京都　日本製薬会社中央区ビル地下3階ーー

薬品を見つめる一人の科学者がいた、小さな笑みを浮かべながら言葉を呟く。

「フッ・・・、これより生物災害の実験を始動する」

そう言って科学者は暗闇の中に消えていく・・・。

8月8日　PM3：58
ーー雅貴の家ーー

チョウ君と裕太以外の三人はゆっくりと空を見上げながら、こんな平穏が続けばいいと思いながら、平穏を楽しんでいた。

色々と楽しんでいた俺達はまだこのあとに起こる恐怖が来るなど、思いもしなかった・・・。

プロローグ（後書き）

お読み頂き有り難うございます。誤字脱字がありましたら、御感想・御意見の際でなんなりと申し付けて下さい。宜しければこの小説、生物災害～呪縛する闇～と作者を応援して下さい。宜しくお願いします！！

CHAPTER．1（前書き）

どうも覇の賢者です。

今回は高校生の気持ち、・・・状況や心情を中心に書いてみましたので、楽しく読んでいただけたら嬉しく思います。

ちなみにこの小説はグロテスクな表現が含まれていますので見る際には、ご注意ください。

CHAPTER・1

８月８日　ＰＭ５：３２
ーー夕方ーー

心地よい響き、ひぐらしが奏でる音色を聴きながら目を開ける雅貴。欠伸をしながら隣に腰を下ろしている巧に話しかける。
「そういえば、一人足りないよな」

「雅貴もか・・・今さっき俺もそう思っていたところだ」

巧も同じ事を思っていたらしく、適当に話をかえされた。少し悲しくなったが此処はあえてスルーしようか、そんな事を考えながら俊樹を見てみると一人足りない人物に電話を掛けていた。
「俊樹、渉のやつ電話にでたか？」

「全然でない・・・」

おかしい・・・時間に関係なく、いつものアイツなら俺の事を気にしないでズカズカと部屋に入ってくるのに。風邪か？でもアイツが風邪ひくか？「一理あるな・・・」とか「うん・・・」とか横から聞こえてくるけど無視だ、そういえば何故俺の心を読めるんだ！？アレか！？エスパー！？
と、色々とそのことでもがき苦しんでいた雅貴は俊樹と巧って一体何者とか思っていた。
堅くして突然電話の着信がなったのを見て全員が俊樹に注目する。

「おう・・・俊樹だけど」

「・・・ザッ・・・・・ザー・・・・・・・・・・ガッ・・・・」

――Ｓｉｄｅ　阿部俊樹――

ノイズがあるせいで何も聞こえない、真剣にゆっくりと聞いてみると渉の声が聞こえるのが分かった。微かにだが、急いでいるのか焦っているのかどちらでも捉えれる声がする。体中から嫌な汗が伝う・・・何かが危険信号を放っている、これは尋常じゃないと。

「・・・た・・へ・・・ん・・だ！・・・・た・・・す・・・・・て・・・・れ！！！」

「渉っ！！？どうした！！！」

「・・・れ・・び・・・・・・・て・・・・・・・み・・ろ！！」

一体なんだってんだ！？何かの冗談か！？俺はチョウ君と裕太を呼んでテレビの前に集合させた。

「巧！テレビの電源入れてくれ！！」

「・・・ああ、分かった・・・」

巧がテレビの電源を入れてニュースがやっている番組に変えると、・・・・・・そこには現実ではありえない残酷な映像が流れていた。人が人を喰らっている？まるで映画かＣＧじゃないか。そう何度も心の中で呟きながらも、俺は今目の前に起きている現実を受け止めきれなかった。

――Ｓｉｄｅ　千葉裕太――

何だコレ？俺は夢でも見ているのか・・・？テレビに映っているアナウンサーは必死に何か言っているが、化け物の呻き声や人間の悲鳴等が聞こえて耳には情報としては伝わらなかった。

これに対して、少し溜息をしながら他のチャンネルに変える。すると、さっきのアナウンサーとはまた別の場所で実況をしているアナウンサーがいた。嬉しいことに、さっきより明確で聞き取りやすい情報を流してくれている。

「石巻駅は今最悪な危機に迫っています！！現場から見渡す限り、元人間の化け物達が人を食べると言う奇妙な光景を皆様は御覧になられたはずです！！」

アナウンサーの後ろでは、２０代後半の女性が集団の化け物達に喰われている。思ってはみたが化け物達の顔や身体が所々腐っているのだ、その腐っている部分からは血や人肉や臓器がこぼれ落ちていると来た。

これでは、まるでＢ級ホラー映画のゾンビ・・・正直言って吐き気がしそうだ。

「おい！裕太！！ちゃんとテレビ見ているのか？」

・・・と、巧に言われてしまったのでテレビ画面に集中する事にした。しかし、あまりにも現実を受け止めきれないせいか軽く現実逃避をしてしまう。

・・・渉は今頃何をやってるんだろうか？あはは綺麗なお花畑だ

ぁ、わぁ！何なんだろぉ？この美しい透き通った川は！あは！アハハハハハ！！

ーーＳｉｄｅ　阿部　巧ーー

駄目だ・・・完全にイカレてしまった（笑）こんなにシリアスな展開なのに何故だろ？笑いが止まらない。俺は笑いが込み上げて来るのを堪えながらテレビ画面に集中する。

そこで、突然大声を出しながらアナウンサーは緊急で入って来た情報を焦りながら喋りだす。

「石巻市内の皆様は、至急矢本の松島航空自衛隊に避難してください！！もう一度言っ！？ーーーーーキャアアアアアァァァ！！！？」

そこでテレビ画面にノイズが走った。さっきまでの笑いが一瞬にして消え、全員が冷や汗を掻く。見たくない場面が脳裏に焼きつく・・・完全にトラウマになってしまうなぁ・・・と、苦笑しながらそう思った。

「・・・そういえば有力な情報が手に入ったな」

「ああ、そうだな」

「しかし問題は矢本の基地に行くまでの足が必要だ」

俺が言った言葉に俊樹と雅貴が反応する。しかし裕太は悲しい事に別の場所にトリップしてるな・・・そろそろ裕太をこっちの世界

に戻すか。

「おい・・・裕太ぁ」

「うふ!!うふふふふふふふ!!」

――ドガッ――

裕太の頭を殴り、正気に戻させる。コイツのせいでシリアスな雰囲気が台無しだな・・・一体何の妄想してるんだ?そんなことを思っていると雅貴が重要な事を口にする。

「そういえば渉の奴平気かな?」

「わ、忘れてた・・・」

皆口々に言葉を発する、今の発言で皆忘れてたのが分かったと思う巧。

今だに目的を決めていないので、ちょうどいい機会だと思い携帯を出す俊樹に電話をかけさせる。

「・・・ああ渉か?お前今何処にいるんだ?」

「・・・ザッ・・・今は・・石巻駅付近の・・・ガッ・・デパート・・・」

「デパート?ああ、あそこか」

「・・・俊樹!早く来てくれよ・・・ザッ・・」

「ああ、なるべく早く行くよ」

そう言って、携帯の電源を切る俊樹。今会話した事を一通り全員に話し、状況と心の整理をする。
「いいか、問題は移動手段だ・・・大抵は車で移動するが今の状況か、ハッキリ言って無理に等しい」
そう難しいのだ。何故なら建造物の破片や車の残骸などがあり、ゾンビがそこらかしこに群がっているのだから。
「この情報をもって車を使う等の無謀な挑戦なんかしない」
「そうだね。歩きしかない、そうと決まれば各々バットやナイフ等の武器を持って」
と、現実から戻って来た裕太は高々と仕切り始める。皆は必要な物、食料、小道具を集め用意した。
家のドアを開け、巧と俊樹中心に心意気を語り始める。
「・・・今からは生と死の狭間、生き残るか化け物と同じになるかだ」
「全員で生き残るぞ！慎重に事を運ぶ」
「「行くぞ！！」」
「「「ああ（うん）（オウ）！！」」」
そう行って俺達は恐怖への第一歩を踏み出す。これから始まる６人の高校生達による死地への物語が・・・。

—8月8日 PM6：47—

CHAPTER・１（後書き）

「どうも！！チョウドリー・アフラヒームです！！この後書きが来るまでは空気的存在だったので、皆の自己紹介をするついでに出ることになりました！」

「まず始めは、木村雅貴とこの私チョウが皆さんに色んな事を紹介します！！」

木村　雅貴
年齢　１６歳
性別　男
性格
ツッコミを担当しており、意外とまわりを見ている。冷静であまり取り乱したりはしない。

特技
パソコン、その他の機械のハッキングを得意とする。

チョウドリー・アフラヒーム
年齢　１６歳
性別　男
性格
根っからのボケ担当。フィリピンから留学してきた黒人でお調子者。

特技
車やバイク、操縦系を得意とする。

「まぁ最初はこれくらい！次回の後書きには巧と俊樹だよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6320h/

生物災害～呪縛する闇～

2010年10月9日23時50分発行